

日付	主要日程	活動内容
7月31日	セントレア発 JFK 着	午後セントレアから仁川国際空港を經由して JFK へ 23時50分頃滞在先へ到着
8月1日	メトロポリタン美術館	到着した後の疲れもあり、美術館を見学。
8月2日	アメリカ自然史博物館	資料収集のため博物館を見学。主に2階のフロアが中心
8月3日	〃	〃 主に3階のフロアが中心
8月4日	〃	〃 主に1階のフロアが中心
8月5日	自由行動	Grand Central Station とニューヨーク市立図書館見学
8月6日	資料整理	アメリカ自然史博物館の資料整理を行う(午前&午後)
8月7日	ニューヨーク市立博物館	午前：資料整理 午後：博物館見学
8月8日	資料整理&買い出し	午前：資料整理 午後：買い出し等
8月9日	アメリカン・インディアン博物館	午前：自由の女神像と博物館見学 午後：資料整理
8月10日	資料整理	午前：コインランドリー 午後：資料整理&買い出し
8月11日	アメリカ自然史博物館	午前：資料整理 午後：博物館見学(見納め)
8月12日	自由行動&ニューヨーク岐阜県人会	午前：自由行動 午後：成田様と面会&自由行動
8月13日	国立自然史博物館	ワシントン D.C.にあるこの博物館を見学。
8月14日	自由行動	Grand Central Station とセントラルパークで過ごす
8月15日	国立アメリカ歴史博物館	ワシントン D.C.にあるこの博物館を見学
8月16日	自由行動	午前：国連本部見学 午後：資料整理
8月17日	自由行動	午前：資料整理 午後：World Trade Center Site 見学&買い出し
8月18日	自由行動	午前：資料整理 午後：市内散策&コインランドリー&買い出し
8月19日	国立自然史博物館	ワシントン D.C.にあるこの博物館を見学
8月20日	帰国準備	午前：帰国準備 午後：散歩&帰国準備
8月21日	JFK 発	午後 JFK を出発→仁川国際空港へ
8月22日	日本に帰国	仁川国際空港に到着→セントレア着 その後自宅へ

# 人類学について

満岡 純弥

僕は7月31日から8月22日までの約3週間、ニューヨークを中心に、人類学について自分なりに資料の収集と研究を行いました。現在大学で人類学を専攻しているので自分の知識を増やしたいということと、人類学の見地を広めるためにどうしたらよいかを探る、という二つのテーマを持って取り組みました。主な活動先は博物館です。より多くの博物館を訪れることで、今後につながるヒントを得ようと思ったからです。

## 《訪問した博物館一覧》

- ・アメリカ自然史博物館(American Museum of Natural History)
- ・ニューヨーク市立博物館(Museum of the City of New York)
- ・アメリカン・インディアン博物館(National Museum of the American Indian)
- ・国立自然史博物館(National Museum of Natural History)
- ・国立アメリカ歴史博物館(National Museum of American History)

## 【そもそも人類学って何？】

「人類学ってどんな学問なの？」という質問は、人類学という言葉が出るたびに聞かれる。どうしてもあまり馴染みのない学問なので、活動報告の前に簡単に説明しておきたいと思う。『人類学』というのは、なにか特定のものを指すものではなくて、考古学・言語学・哲学のような様々な学問(または考え方)を含んでいる、総合的な学問だと思っていただければよいと思う。ただし、自分はまだ学ぶ側の身分でありますし、多くのことを語るということではできないので、説明が不十分かもしれませんが、イメージだけでもつかんでいただけたら幸いである。

## 【博物館別の研究報告】

### ◎アメリカ自然史博物館◎

この博物館は、映画「ナイトミュージアム」のモデルとなった博物館としても有名ですが、「人類学の聖地」としても知られている世界有数の博物館です。建物は地下と1～4階の構成となっている。地下は宇宙ホールがメインとなっていたため、今回は対象としていません。

#### [1階] →北西海岸インディアン

このエリアでは、アメリカからカナダにかけての北西海岸地域に暮らしているインディアンについて、その個性的な道具や日常品、マスクなどで説明されている。紹介されている主なインディアンは、KWAKIUTL, TLINGIT, HAIDA, THIMSIAN, NOOTKA などであり、自分が知らない名前もあった。この中で、特に KWAKIUTL 族はルース・ベネディクトの『文化の型』で取り上げられている民族の一つであり、彼らは自らの汚名をそそぐために他人を殺して名誉を守ったり、明確な組織社会が存在しない、など一見すると凶暴で野蛮な人々のように書かれていたが、必ずしもそうではないということが分かった。彼らは集団で魚を捕らえるためのワナを設置して協力して魚をとったり、先祖代々の踊りや儀式を大切にするという北西海岸の他の民族にも見られる特徴がある。また、KWAKIUTL 族に限らずこの地域の民族に共通して見られる特徴は、動物や人間をモデルにした木製の巨大な像を作ることである(中には5m近いものもあった)。それが彼らの文化である、と言ってしまうと一言で終わりだが、僕には不思議でならないのでまた調べてみたいと思う。



(AMNH の北西海岸インディアンホールより)

### [1階] →スピッツァー人類起源ホール

その名の通り、人類の起源について様々な角度から考えるエリア。ここでの起源の考え方は DNA と化石の二つのポイントに分かれる。まず、DNA でみてみると、ヒトとチンパンジーは DNA が約 98.8%同じで、1.2%しか違いがない。ということは、チンパンジーのような類人猿とヒトは共通の祖先を持っていると言えるのだが、このわずかな 1.2%が大きな違いを生み出しているのだ。いつ、どのタイミングで現在の類人猿とヒトが枝分かれしたのかはまだはっきりしていないが、およそ 6~7 万年前ではないかと言われている。

一方、化石から起源を考えてみると、哺乳類共通の祖先から始まり、そこからサルの仲間が誕生し、地上に降りて生活するグループが現れて、二足歩行に至るまでの過程が標本やそれに付随する説明で詳しく解説されていた。また、頭蓋骨の形からその当時の顔の様子を復元したり、他の生物の手や腕の骨格を比較するなど実践的な研究がなされていて、とても興味深かった。「人類の起源」は、自然科学や考古学といった分野になるだろうが、人間や人間を取り巻く環境について考える上で、このテーマは人類学の根本的な部分を支えているため、重要度は高いと思われる。僕自身は考古学に強く興味をひかれているわけではないが、現在の人類がいつ・どのように誕生したのか、また、ネアンデルタール人やクロマニヨン人との関係性についてはまだまだわかっていないこともあるので、そのことについてもっと知りたいと感じたし、このことをきっかけに考古学にもっと興味を持てるようになると思った。

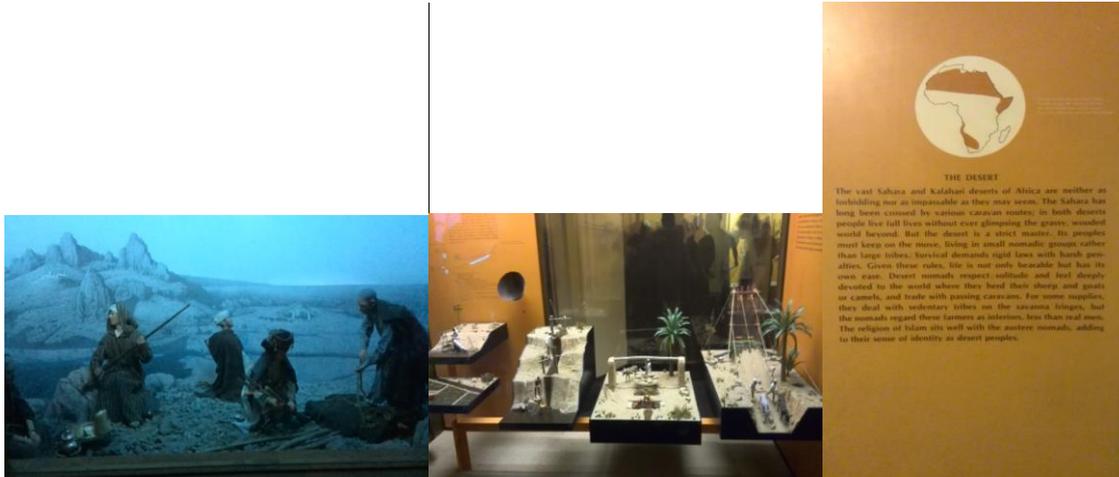


(AMNH スピッツァー人類起源ホールより)

## [2階] →アフリカの民族

この『アフリカの民族』のエリアでは、砂漠・ジャングル・川辺と異なる環境に住む人々の生活の違いを知ることができる。僕自身はアフリカに行ったことはないが、将来アフリカの人々を救うためにアフリカで働きたいと思うし、その為に大学で人類学を学ぼうと思ったので、このエリアはまた訪れることになると思う。

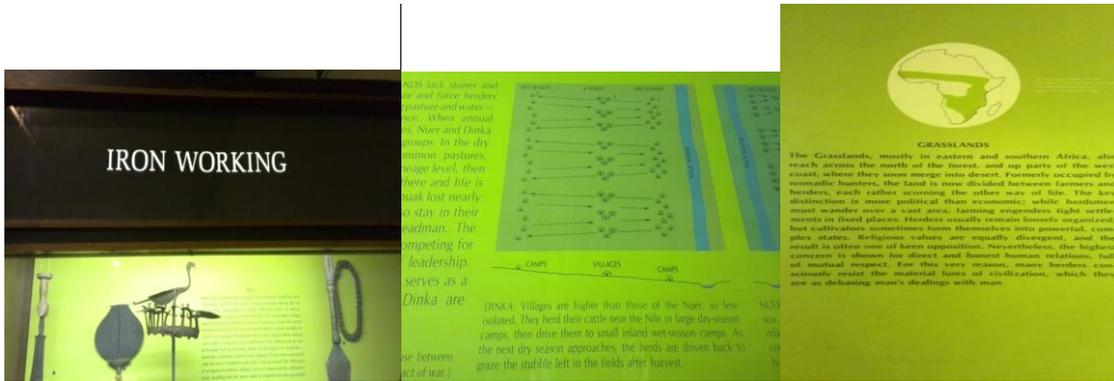
<砂漠> 主にアフリカ大陸北部地域のことを指す。宗教的な影響を強く受けていて、特にイスラームの影響は見逃せない。古代のアフリカの王朝を見ても、キリスト教を信仰していた王朝はとても少ないことから、この地域におけるイスラームの役割を考えてみることでより深く考察できると思う。砂漠地帯では水の確保が難しいことから、水をえるために道具を発達させるなど、初期段階からかなり高度な知識があったと思われる。さらに、狩りではなく農業をしていたことも特徴の一つで、狩猟と農耕の二つの性格を持ち合わせているようだ。



<ジャングル> 主に中央から西アフリカにかけての地域を指す。この地域では、踊りや信仰、儀式が重要視されていると感じた。信仰や儀式などはほとんどの地域の民族にも見られる特徴である気がするが、地域ごとに違う特色があるし、そのことについて掘り下げて調べるのも面白いと思う。また、これはよく知らなかったのであるが、ジャングルの地域では“聖なる社会(sacred society)”というものが存在していることを知った。他の集団のリーダー的存在であることが分かったが、何しろ初めて知ったことなので詳しく調べる必要がある。



<川辺(Grass Land)> 中央から南アフリカにかけての地域を指す。主な特徴は鉄細工である。農具等の日常生活の道具としての利用が目的で鉄が使用されており、後に出てくるが中南米地域の儀式で使うための神聖な物と比べるとその扱いが異なっている。また、雨季と乾季で住む場所を移しているのも同じアフリカの他の地域には見られない特徴である。そして、最大のポイントは年齢によって「村」の中で自分の住む場所が変わるということである。この「村」には年功序列の考えに則した配列が存在し、長老がトップでその次にナンバー2が、その次に…という具合である。これはアフリカ特有なのか、他の地域にも見受けられるのかこれから調べていく。



(AMNH アフリカの民族ホールより)

## [2階] →メキシコ・中央アメリカ&南アメリカの民族

ここで扱われている主な文明(民族)は、マヤ・インカ・アステカなどであり、これらはきっと多くの人も聞いたことがあると思う。しかし、中には僕自身初めて目にした名前もあり、例えば CHAVIN, MOCHE, SICAN などである。今回は自分の今後のための資料収集でもあるので、そのような(自分にとって新しい)民族がいるという発見になり、とても勉強になった。この地域で見られる特徴は、先ほども紹介したが金属の利用手段が農具ではなく、儀式で用いる神聖な物として扱われていることである。さらに、死後の世界についても独自の世界観が図によって示されており、それによると、ある人が亡くなったとき、その魂が肉体から抜け出し、死の世界への旅をするのだという。その旅の途中で魂そのものが死んでしまうこともあるらしく、古代エジプト王朝で見られる死生観とはまた異なった世界が存在する。

南米に目を移すと、南米は主にアマゾンなどの森林や湿地帯が多く、その気候や土地に合わせた生活の工夫が見受けられる。生活の工夫はどの地域でも見られるが、地域によって特色が出るので、その民族について知る上で重要な要素となりうる。南米地域では多くの場合、男性が狩りをして女性が農作業や家事をする、といった性別による作業の分担化が見受けられた。比較的近現代の社会にも見られる特徴だと思う。また、文化面で見てみると、南米地域にもシャーマンが存在していたことを今回初めて知り、とても驚いた。シャーマンはわりと様々な地域に存在していて、その役割も病人の治療など非常に似ているものが多い。ただ、例えシャーマンが存在したとしても、その社会的地位やどのようにしてシャーマンになるかなど、まだわからないことも多い。これから地域別シャーマンの特徴を調べてみる必要もある。



(AMNH メキシコ・中央アメリカと南アメリカの民族ホールより)

## [3階] →東部森林地帯および草原インディアン

このエリアでは、やはり『北西海岸地方のインディアン』との比較がなされるだろう。その理由としては、この両者は同じ大陸にこそ住んでいたものの、環境も違えば、風土・気候も異なり、北西海岸とは違った一面を持った人々が暮らしていた。まずその違いが顕著に表れているのが、衣服である。北西海岸地方ではあまり展示がなされていないので、比較が少し難しいが、少なくとも東部森林地帯のインディアンは、帽子、コート、レギンスなど気候に合わせて衣服を着用しており、寒い地域ならではの工夫が見られた。ムースなどの毛皮でコートを作っていた寒冷地域によく見られる特徴だ。

また、草原インディアンは、恐らく多くの人々が「インディアン」と言われてまず頭に思い浮かべるインディアンの代表例であろう。しかし、彼らがどのような民族で、どのような人々の集まりなのか知っている人は少ないであろうし、実際に見てみないとわからないものも多い。頭に付けている羽の飾りが何を意味しているのか、どのような踊りが行われているかは自分も知らなくて驚かされることばかりであった。また、現在の手話のような手を使ったコミュニケーションの手段は非常に珍しいと感じた。(※写真右端)



(AMNH 東部森林地帯および草原インディアンホールより)

### [3階] →太平洋の民族

博物館のこのエリアは、20世紀最大の人類学者と言われている、マーガレット・ミードが創設に大きく貢献しており、彼女の研究成果の集大成のような場所になっている。太平洋地域では主に、ミクロネシア、オーストロネシア、ポリネシアという三つの地域で分類がなされており、世界の他の地域とは違う部分が数多く見られる。さらに、ミクロネシアの人々は比較的日本人に近いと言われていて、僕自身とても興味深く見ることができた。

太平洋地域の特徴としては、イースター島から東南アジア、ニュージーランドをカバーする広大な海に影響を受けた海洋的な性格が強く表れていることである。例えば、船をモチーフにした作品が作られたり、貝や魚の骨などがあしらわれた衣装が作られるなど、海洋民族らしいものも多く見られた。そのような工芸品に目がいきがちだが、オーストラリアのアボリジニなどは、かつて自分たちだけで平和に暮らし、その文化を大切に伝承してきたが、西洋人の影響や近代化により、以前のままで生活することが難しくなり、過去と現在の狭間で苦しんでいる歴史も垣間見ることができた。また、例えばミードのように研究者の立場でその民族について精通しているのではなく、人からの情報であったり、偏った知識しかない、ある民族に対して偏見を抱きやすくなってしまっているのも一つの事実である。その点、ミードは太平洋民族に対して持たれていた人々の偏見(あるいは間違っただイメージ)を大きく変えることに成功し、人類学的にも大きな功績を残した。そんなミードの研究成果に触れることができ、大変光栄に思う。



(AMNH 南太平洋の民族ホールより)

### ○ニューヨーク市立博物館○

この博物館はニューヨークについて過去から現在について、色々な角度から知ることができる。“歴史”という過去から現在まで単なる時系列で追ってしまいがちだが、単純に辿る以外にも歴史を知ることができるんだ、と感じさせられた。

博物館の構成は、地下・1階・2階・3階となっている。今回は地下は対象外である。1階は主にミュージアムショップと期間限定の展示を行っており、今回は“A Beautiful Way To Go”という題の展示であった。これはニュ

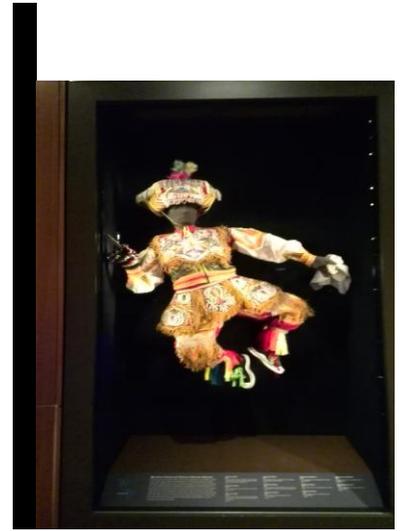
ーヨークにある Green Wood Cemetery がいかにして誕生したのか、その設計図や当時の発明品・娯楽の道具や絵画などで知ることができる。壁や床なども巧みに利用されており、博物館と美術館が合わさったような作りになっている。2階は近現代のニューヨークを中心とした活動家達の記録を見ることができる。先程も少し述べたが、歴史というと既成事実を過去から追っていくものと思われがちだが、複数の視点を持つことで違った一面が見えてくる。ニューヨークの場合、社会運動がとて盛んで、その流れがパネルやモニターなどで詳しく説明されていた。特に女性の解放運動や公民権運動、さらにはデモ活動や自転車専用レーンを作ろうという運動など積極的に行動することで、周りを巻き込んで現状を変えようとする姿が見られ、アメリカの中でも活発な地区なのだということを再認識した。さらに、3階は現代のアートと建築の紹介になっており、ニューヨークの中でも一人暮らしの割合が最も高いのはマンハッタンであることや、日本の建築技術がニューヨークでも高い評価を受けていることなどが分かった。ニューヨークの歴史や“今”について知るには良い場所であると思う。博物館らしくない博物館で、自分の今までのイメージを変えてくれたという点でも訪れることができ、良かった。



(ニューヨーク市立博物館より)

## ◎アメリカン・インディアン博物館◎

スミソニアン博物館の一つで、主に北米地域を居住エリアとしているインディアンについて知ることができる。ひとくちに『インディアン』といっても住んでいる環境も違えば、生活のスタイルも様々に異なっているので、インディアンについて何も知らないけれど、どんなものか知りたいという人にもオススメな博物館だと思う。主な展示の内容は、この博物館の前身の「カスタム・ハウス(税関の建物)」がいかにして博物館として利用されるようになったのか、インディアンの生活用品の展示、インディアンの現在の姿、伝統的なインディアンの踊りなどである。僕自身、アメリカ自然史博物館やこのアメリカン・インディアン博物館を訪れるまで、Native American について全然知らなくて、資料を集めている間も驚きの連続であった。博物館の構成は1階と2階になっており、1階では北米インディアンの日用品等が展示されており、特に動物の毛皮や何枚もの布生地を使って作られた民族衣装は、とても丁寧な作りになっており、細かい手作業が得意であったことが想像される。また、アメリカ自然史博物館で紹介した北西海岸インディアンの個性的なマスクも多数展示されており、彼らの生活を垣間見ることができた。また、他のフロアではインディアンの人々と現代の関わりについてのコーナーもあり、ミュージシャンとして活動していく中で自分がインディアンであることに誇りを持っているんだ、というある一人のギタリストの言葉に胸を打たれた。インディアン達は、かつてイギリス人が現在のアメリカに上陸してからというもの迫害の歴史を歩んできたが、そんな中でも自分たちのアイデンティティーを見出そうする姿が描かれており、とても考えさせられる内容だった。その他にもインディアンの伝統民謡(ダンスや踊りなど)をビデオで鑑賞できるスペースがあり、ダンスの際に身に付ける衣装の展示も見ることができたので、とても良かった。アメリカ自然史博物館でもそうだが、日本にいとインディアンについて考えることもインディアンの生活を知ることもないが、今回博物館を訪れてインディアンを直に体験することができ、貴重な体験となった。今後も継続して調べていきたい。



(アメリカン・インディアン博物館より)

## ◎国立自然史博物館◎

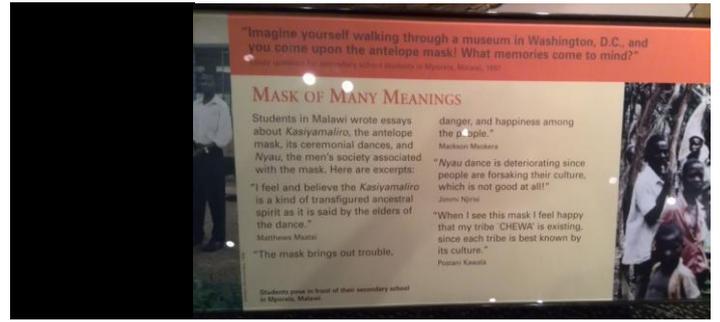
ワシントンD.C.にあり、スミソニアン博物館の一つ。ニューヨークにあるアメリカ自然史博物館と比べると少々規模は小さいが、展示の内容は異なる。アメリカ自然史博物館では動物の標本や世界各地の民族の紹介から地球や宇宙まで幅広い展示がなされているが、国立自然史博物館はかなり自然科学系の展示が多かったように感じた。博物館の構成は地下・1階・2階となっているが、地下はカフェとインフォメーションセンターのため対象外とした。1階は主に海の生物が実物や標本で展示されていたり、陸上の哺乳類や恐竜の化石の展示などもある。これらはどれも生物学的な要素が強く、人類学とはあまり関係がなかったが、個人的に興味のある分野でもあったので今回は見学した。そんな中1階のフロアで僕が目にしたのは、“African Voices”である。それまでアフリカの民族については調べて色々なことを知っていたつもりだったが、この“African Voices”では各年代別のアフリカを市民の声などを交えながら、ユニークな展示でわかりやすく説明されていた。特にアフリカの奴隷貿易についての記述は、単なるアフリカの人々についての研究や民俗について知ること以上のものを感じた。ニューヨーク市立博物館でも同じようなものを感じたが、ある一面から物事を捉えるよりも多角的に色々な方面から見ることで違った印象を得られるし、偏見のような偏った考えに固執する可能性が低くなると思う。人類学を学ぶ上でも大切なことであるし、他の事柄についても言える。

2階では、主に世界の鉱物・昆虫の世界などの展示があったが、2階の中で注目したのは“Written In Bone”である。これは考古学の分野であり、滞在中ではあまり触れていなかったものだ。この展示の内容は、残されている骨からこの骨の人物がどのような人であったのか、死因は何か、いつ頃の時代に生きていた人なのか特定する工程などが示されており、現在の犯罪捜査に用いられている手法にとってもよく似ている。また、その考古学の知識が逆に犯罪捜査に利用されることもあり、とても興味深かった。

ここで遺骨からどのような人物だったのか特定する例の一つ挙げてみる。ある遺骨があったとして、その骨の中の肩甲骨の右と左のバランスがずれていて、背骨が猫背のようにカーブを描いて前方に曲がっていたとする。ここから推測できるのは、恐らくこの人は農夫か工場などで働いていた人で、日頃どちらかの肩で荷物を運んでいたせ

いで負担が偏り、長年の積み重ねで肩甲骨が固まってしまったと考えられる。更に、その荷物が重かった為、前かがみになってしまい猫背になった、というようなことが推測できるのである。また、このような結果が出た場合、この人がどのような場所に住んでいたかも大まかに特定することが出来るはずである。

国立自然史博物館では考古学に触れて、より幅広い知識の必要性を感じた。今後に生かしていきたい。



(国立自然史博物館より)

## ◎国立アメリカ歴史博物館◎

前述の国立自然史博物館に続き、ワシントン D.C. にあるスミソニアン博物館の一つ。その名の通り、アメリカの歴史について知ることが出来る博物館である。構成は1階・2階・3階となっているのだが、時間の都合上3階は見る事が出来なかった。再び行く機会があれば、3階も含めて全て見る事ができたらいいと思う。建物の正面から入ると、そのフロアは2階になっており、手荷物は全てチェックされた(博物館にもよるが、ほとんどの場合手荷物は大きなカバン一つが検査される)。

2階から見学を開始したが、この博物館に入っただけで目にするのは、やはり巨大な星条旗をモチーフとした作品であろう。何の素材からできているかわからなかったが、銀色に光り輝いており、アメリカにおける国旗の(あるいは星条旗の)役割の大きさというものを感じた。2階で主に見学したのは、“Within These Walls” や “American Stories”、“Documents Gallery”などで、このうち“Within These Walls”では実際に人が住んでいた家そのまま博物館の展示品として展示されており、一軒の家とそこに住んでいた何組かの家族の時代の移り変わりの様子が年代ごとに描かれていて、とても面白いと感じた。一軒の家を題材としてその時代背景を知る、と言ったら日本の場合、「日本明治村」や「日本大正村」などが想像されると思うが、この家が展示されていたのは国立の博物館であり、その捉え方の違いを感じた。暮らしていた時期により生活様式は変化するし、例えば戦前・戦中・戦後で比べても大きな差があるはずだ。それを家財道具や当時の貴重な品々で詳しく解説されていて、『歴史』というものをどう扱うのかとても参考になった。また、別のエリアでは星条旗と国歌誕生の秘話があり、アメリカ合衆国で一番最初に掲げられた星条旗を見ることができた。撮影は禁止であったが、普段は見ることができないためドキドキしながら見学した。

1階では、まるで万博か発明館に来たかのような場所で、歴代のアメリカの発明品や工業製品の数々で、それらの品々を見ることでそれがどんな時代だったのか知ることが出来る仕組みになっていた。例を挙げると、蒸気機関車・車・エディソンの電球・ベルの電話・紡績機などである。実物ばかりで、アメリカの発展と成長の栄光の歴史を見ているかのような感じだ。



(国立アメリカ歴史博物館より)

## ◎まとめと感想◎

まず初めに、今回ニューヨークへ渡航する機会を与えて頂き、ありがとうございます。自分一人の力だけでは海外に行くことが難しかった中で、このような形で遊学支援をしてくださった岐阜県青少年育成県民会議の方々には、本当に感謝しています。ありがとうございました。また、滞在期間中、お世話になった関係者の方々にも感謝したいと思います。

今回、ニューヨークに滞在している間、予定していた場所にはほとんど行くことができ、満足しています。特に、アメリカ自然史博物館は日本にいたときからずっと行きたいと思っていた博物館の一つで、訪問が実現して嬉しく思います。また、展示品は日本では見られない物ばかりで、またさらに学びたいという意欲が湧いてきました。

ただ、渡航前の一つのテーマであった、積極的な情報の発信はあまり実現できませんでした。できなかった原因はいくつかあると思いますが、一つ目にパソコンを持っていかなかったこと。二つ目に、一日の予定が終わってからレポートする余力が残っていなかったこと。そして、一番の原因は『人類学』をより知ってもらうための工夫が足りなかったことです。日本で大学生活がまた始まって、自分なりの考えがしっかりと持てるようになってから、日本国内からでも情報の発信を行っていったらいいと思います。

最後になりますが、ニューヨーク、ワシントンの博物館を訪問し、人類学についてより知識が深まったと思います。特に、民俗、歴史、考古学などの分野で実際に自分の目で見て、体感することができたのはとても貴重な経験となりましたし、必ず今後生きてくると確信しています。また、今回経験したことを生かすためにも、様々なイベントに参加したり、自分で何か行動を起こしていきたいと思っています。また、ニューヨークで初めて一人暮らしをして、自炊や自分の身の回りのことなど、なんでも自分ひとりでやらなければいけないという状況で、「一人でする」という力も身に付いたと思います。

三週間という長いようであっという間の期間でしたが、とても有意義な時間を過ごすことができ、今回僕に関わってくれた全ての人に心からお礼を言おうと思います。

本当にありがとうございました。